



### 花に託して

### 第11号

「種」が「ピース・シード」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため、小学6年から高校3年までの49人が、自らテーマを考え、取材し執筆しています。

これは夏にかけ、色とりどりの花が咲く季節を迎えます。花は見る人の心を和ませてくれます。70年前も、花は戦争で傷ついた人々の心を慰め、復興に向けて勇気づけました。

1945年8月8日の空襲で市街地が大きな被害を受けた福山市。戦後、バラが市民の絆を強める役割を担ってきました。同年8月6日、人類史上初めて原爆が落とされ一面焼け野原となった広島市に、いち早く咲き、市民を励ましたのは、後に市の花になったキョウチクトウや、カンナでした。

## 戦災復興希望の一輪

### 焦土に咲いた生きる力

### キョウチクトウ

#### 広島市の花

キョウチクトウへの思いを話す緒方さん(広島市中区)



広島市中心部の川沿いや公園などにあるキョウチクトウ。赤や白の花を咲かせます。「70年間(75年間とも)草木も生えない」と言われた原爆投下直後の広島でいち早く咲き、市民を勇気づけました。そんなキョウチクトウを題材にした絵本があります。

「来竹桃物語 わすれていてごめんね」。被爆したキョウチクトウの語る体験談が一人の少年の心に届く、という内容です。原爆で犠牲になったのは人間だけではなく、動物や植物も。未来を支える子どもに、一つの命の重みを絵本で伝えたい。作者の弁護士緒方俊平さん(68)「東区」は話します。

### 福山市の花

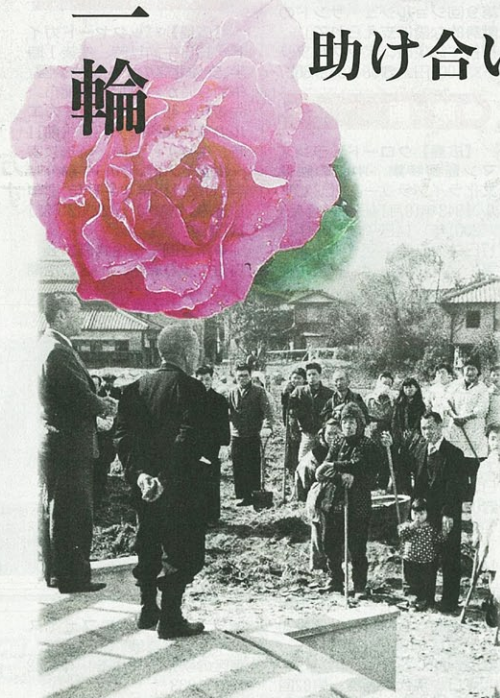
### バラ

咲き誇る花を前に、植え始めた当時を振り返る小林さん(福山市のばら公園)



### 助け合い 住民の絆紡ぐ

福山市が「ばらのまち」となったのは、1956年、当時空き地だった現在のばら公園(花園町)に、市民が約千本を植えたのがきっかけでした。45年8月8日の空襲で市街地の8割が焼け野原となり、復興する中での出来事でした。



バラの植樹のため、現在のばら公園に集まった住民たち(1956年3月、小林さん提供)

「毎日バラを見て、対話するように世話をした。水がほしいのか肥料がほしいのか分かるようになった。植え始めた一人、福山はら名誉会長の小林幹弥さん(90)は愛情を注いで育てる大切さを話します。住民が一緒に育てることで、お互いの絆も深めることができました」

### 児童が育む平和の願い

### カンナ



カンナを育てる基町小の児童

カンナも、被爆直後の広島に咲きました。基町小(広島市中区)では、被爆樹木のエノキの3世を植えた虹の杜をはじめ校内の10カ所で、約50株が元気に育ちます。

09年からカンナを育てるようになった。栽培委員会が水やりなどの世話をし、先輩から後輩へ大切に引き継いでいます。委員長の6年青木優美さん(11)は「当時、花の咲いたカンナを見つけた時、みんな希望を感じてうれし泣きしたのと同じように、どんなに辛い時も希望は起きるといふことを伝えたい」と話しています。

### 永井博士のバラ 被爆医師の祈り伝える

### アンネのバラ 前向きな姿 国境越えて

自身も被爆しながら被爆者治療に当たった長崎の医師、永井隆博士(1900-1991)年ゆかりのバラの木が、広島市中区の平和大通り緑地帯にあり、鮮やかな赤い花を咲かせる「レッド・ラジアン」という品種。高さ約1.5メートルの株が並びます。元は、永井博士宅の庭に咲いていた。広島と長崎の青年が広島市で平和交歓会を開いた49年、病床の博士から贈られました。1株は一時弱りましたが、広島市植物公園(佐伯区)での「治療に当たった長崎の医師、永井隆博士」を記念して、被爆70年のこと13月、戻ってきました。



永井博士ゆかりのバラについてジュニアライター(左)に話す松山委員長(右)

世界中で日記が読み継がれるアンネ・フランク(1929-45年)。第2次世界大戦の悲劇の象徴といえるホロコースト「トyna人」大規模により、15歳の若さで命を落としました。彼女をイメージしたバラが、福山市のホロコースト記念館で育てられています。赤、オレンジ、ピンク、花は咲き始めから終わりまでの間に色を変えます。生きる希望にあふれ、ますますきれいな花になろうと、思いを残したまま散らかる。隠れ家生活を余儀なくされ、強制収容所に入れられても前向きな気持ちを捨てなかったアンネの姿を重ねています。「まるでバラの感情が表れているみたい」。同館の学生(高2)轟岡舞子



アンネのバラの世話をするスモールハンズのメンバーたち